

広島俳句倶楽部

令和七年一月作品集

城のある町

栄吉

城のある町に育った。そのせいだろう、今でも城が好きだ。もともと、最近も、城の跡や遺構などに、より関心を持っている。

拙宅の近くに城の跡があると聞き、早速、講座に参加した。場所や規模などから考えると、それは戦のためというより、今日の言い方をすれば、集会所に近いものだったらしい。そうだとしたら、どのような人が集まり、どんな会話をする城(集会所)だったのか。興味は尽きない。

色変へぬ松や故郷の一里塚

この奥に八幡御座す秋の蝶

連休の朝の静寂に耐鶴

短日の古本市の明りかな

短日や影に負けどと急ぐ道

玉砂利に抱つこ叶はぬ七五三

落葉降り見上ぐる空に天守閣

落葉踏む小さき足音続きをり

冬紅葉橋の向うへ続きたる

散りたての木の葉差し込む文庫本

《作品鑑賞》

暁子

城や城址、小さき者の成長、季節の移ろいとそれを愛でる心……、栄吉さんは衰えぬ関心と細やかな観察で、幅広く句作をされているようです。

色変へぬ松や故郷の一里塚

城は滅んでも城に続く一里塚の松は美しいままです。色変へぬ松は、懐かしい故郷であり、節を曲げぬご自身なのでしょう。

玉砂利にだつこ叶わぬ七五三

着飾っての宮参り、本人はたぶん三歳。草履では歩きにくい参道で、だっこをしてほしいのです。いじらしく一生懸命歩く姿、それを見守る祖父の姿が目につかびます。孫の成長を寿ぐ気持ちも伝わってきます。

散りたての木の葉差し込む文庫本

公園での読書中でしょうか。身はとりに散ってきた新しい木の葉が捨てがたく、文庫本に挟み込みました。行く秋を静かに楽しんでいる心のゆとりを感じる一句です。

佐保光俊

言の葉の令間に雪の積りけり
しばらくは蹄が沿へる雪の道

高尾ひとみ

峡の道歩けば雪のしづりけり
雪道に足休めれば空青し

あざみ

雪載せたままに畑の菜を揺る
雪兔畑に足跡深く付け

亜矢

初雪や出かくる母に声をかけ
登校の自転車の雪手で払ふ

綾乃

初雪を詠まばや五十年先も
風花や娘に恋の匂ひして

井藤希

庭に出て僅かな雪を踏んでみる
雪止まぬうちにと急かす酒支度

大畑恵

高速の左手に見て雪の富士
雪被る富士を車窓に眺めをり

暁子

赤き雲に雪の積んでは落つるなり
雪やんで玻璃へ日の差す厨かな

すみれ

郷一面丸く覆ひて雪真白
どの雲からこの風花は来たのやら

知佳子

肩の雪そのままにして坂上る
仰向けに寝そべつてみる雪の原

ちどり

子に誘はれ二階から見る雪景色
雪の駅鯛焼買うて食ぶるなり

辻純江

安芸小富士消え入りさうな雪催
初雪の日を受けながら舞ひにけり

ふじ女

雪ちらちら予報通りの素直さで
雪の道お鍋ほくほく運ばれる

松田裕子

降りしきる雪の露天湯赤子抱き
風花を頬に朝日のなか歩く

村上正人

窓開けて伏す母に見せ庭の雪
大山毛櫨の根元より雪とけはじむ

森口良樹

兄痴れて我も他人や夜の雪
バス降りて道を小走り細雪

秋楡

待合で世間話や外は雪

大原良子

駆け上がる駅の階段雪催

上島康子

雪の朝読経聞こゆる寺苑かな

河原静子

外に出て孫と作りし雪だるま

紀英子

雪道や歩く人影見ええずして

熊谷ゆり子

吊り革に揺れて眺むる雪の街

桑門わかこ

雪深き一日静かに暮るるかな

桜陽

ペダル漕ぎ夫と銭湯雪花の夜

高嶋絹代

雪踏んでバス停までの細き道

高梨英子

雪女郎すこし休んでおゆきなさい

土肥律子

吾が頬に降りきて雪の融けにけり

金一

舞ふ雪に子らの歓声響く庭

樵子

雪の夜や寝つけぬ子らの声のして

古川廣子

空仰ぎ今年まだ見ぬ雪思ふ

みさ子

真白なる雪の庭へと一歩踏む

美耶

対岸の山に積りて今朝の雪

やす保

雪晴の出窓カーテン輝けり

山崎桂子

初雪や抱く子は父を見つめたり

山野ウタ

新雪を踏みしめる音新聞来

雲雀

小雪舞ひ待っていたよと手を広ぐ

牡丹雪頭に肩に乘せてゆく

これほどの紅葉の道はどこへゆく

冬支度さなかの家に道を問ふ

実南天よく似た形の山つづき

雪雲の方へと古道向きを変へ

奮舞へばたちまち木の葉降つてくる

正面の冬の日差がまた翳り

地の神に湊の神に寒氣入る

冬の虹歩きし村に架かりけり

城のある町へと越ゆる冬の川

城の濠渡るとき止む時雨かな

篠山に訪うたる寺の薄もみぢ

丹波栗うまし篠山歩きつつ

枝豆に話し尽きぬも丹波かな

六甲に何やらゆかし思草

六甲を友と辿りて秋惜しむ

冬薔薇に寄れば朝の日右頬に

峽に日はもう届かざり冬の菊

冬の菊褒めれば媼分けてくれ

いとけなく大鷄鳴いて冬の水

川べりを辿り冬木の桜かな

霧深し船笛長く船出づる

老夫婦手をつなぎ来る落葉道

山里のわが家のまはり暮早し

寒林に鳥の来てをり賑やかに

子らの泣ぐ層簾にほろ酔ひしてをりぬ

見慣れたる榎の洞の淑氣かな

幼な子の大きな声の初電話

初星を見上げてゐたる山家かな

雪載せて郵便車来る山家かな

雪合戦大人も子らも声上げて

佐保光俊

高尾ひとみ

あざみ

冬の蠅巨木の幹に止まりをり

大通りを行つたり来たり帰り花

水鳥の潜る小さき音をたて

川岸の棟に北風の吹きにけり

冬紅葉鳩ゆつくりと舞ひ降りて

トラックに赤き雲梯寒日和

冬日差す庭に次々雀来る

冴ゆる夜の爪の長きに氣つきたる

教会の二階に座り冬日差

教会の高き天井冬の星

亜矢

久々に川の字になり年迎ふ

あをあもと淡海極まる大旦

句心の凜々として初御空

白髭の神に浪寄す淑気かな

しづかなる湖の鳥居へ初松籟

雑煮煮る瀬戸の花嫁歌ひつ

年酒の座淡海の肴揃ひたり

若水の志学の指にこぼれけり

初比叡古老の脛も立ち上がる

初旅や成人したる子に任せ

綾乃

外つ国の子の撞く鐘よ紅葉寺

石段を埋めてゐたる散紅葉

参詣の心惑ふや冬紅葉

二人して寺苑の落葉掃くをみな

冬滝や丘に十六羅漢座し

宝塔を束の間照らし冬日落つ

年の瀬のいつもの街に出てみたる

船で来し海の社に初日差す

日溜りに集まり来たる初雀

どこからの枯葉か庭へ三つ四つ

井藤希

枇杷の花小さき蕾に日のあたり
冬の予定残して兄の逝きにけり
兄の居ぬ家に咲きたり寒椿
悲しさに冬の椿の咲き始む
臘梅の香に誘はれて庭に出づ
臘梅を供へ次兄を偲びをり
ほこほこと炬燵にあたり蜜柑剥く
冬の日が隣の屋根の向うから
目白来て賑やかになる梢かな
夫の来てそつと目白を覗きたる

大畑恵

小半時窓開け放ち冬日和
冬の谷離れてもなほ水の音
北風の止まぬまま峡暮れにけり
初苗独り占めして山家かな
ふる里の山見て飽かず今日の春
弥山嶺の半日は晴れ六日年
左義長に風向きはたと変りたる
寒風へ向かへる貨車の長き列
残照のはやばや消えて冬の海
だんだんと雪深くなる家路かな

暁子

極月の吉備の講義を聞いてをり
着ぶくれて雲ばかり見るひと日かな
寒いねと夫の両手のティーカップ
左手で書くことに慣れ冬の星
玄関の土間掃き終へて年迎ふ
鉢植の真ん中に据ゑ福寿草
ミス嘆く吾子を促し初菰
初詣の人に押されて前に行く
傍に居てゲームする子と初笑
人混みに何やら浮かれ初買す

すみれ

子を抱いてコートの内にくるみたり

指先でついてみたる初氷

寒林に一つ二つと灯り点く

枯葎ところどころに実の付いて

まっすぐに立ちて待ちをり初日の出

川渡る鳥の白さや初日の出

初旅の船より船に両手振る

臘梅を眺むる人に加はりぬ

雪達磨転がす下にアスファルト

忘れぬし絵本手に取り春隣

知佳子

川沿ひの桜紅葉を歩きをり

参道で寝入る赤子やなかまど

山眠る母の家までまだ遠き

母が家から冬田を通り帰りけり

故郷から冬夕焼を帰りけり

冬座敷遺影の姉に向き合ひて

茶の花や姉の忌日の墓参り

順々に家族みんなが風邪を引き

目が合うて赤子笑ふやシクラメン

冬晴や子は大阪へ旅立ちぬ

ちどり

短日や手術室まで夫送る

冬夕焼術後の夫の手のぬくし

山茶花の蕾一杯見てとほる

山茶花の一輪を持ち見舞ひけり

もどり来る小鳥の群や冬桜

幾たびも手をふる別れ冬の駅

シーソーの上りしままの冬夕焼

玻璃戸から光る海見る冬至かな

夕空に細き月ある三日かな

諏訪湖より雪の富士見る頃がよし

辻純江

大大根隣にもらひ提げてみる

毛糸編む解いて編んでまた解き

初詣あれこれ思ひ坂上る

初神籤帯に大吉挟みけり

高きより辺り見てゐる初鴉

元日に親子で肩を揉み合ひぬ

掃初の赤き花びら手に取りぬ

御降や賑はふ道を通り過ぎ

臘梅をとききり見上げ庭を掃く

収穫を目に浮かべつつ耕せり

雲雀

足音が響き寒鯉目覚めたる

滝壺に雪次々と同じもなく

雪晴の空港あの子が飛んでいく

缶コーヒー雪眼が覚める両手かな

豆撒に大人になりし証拠あり

柊挿す話し合いする父と子よ

ご自由にお取りください年の豆

成人式晴れ着の笑顔会釈する

解氷を根元から吸う大木や

冴返る神社は森の奥に見え

ふじ女

乳匂ふ赤子のくしやみする度に

初氷日の差す前に融けにけり

吾に熱燗夫にぬる燗よき夕餉

極月の満月我に迫り来る

風花の真青な空に吹かれをり

数へ日や吾はひとりて古書店へ

深呼吸初東雲の空へ向き

初硯右の肩光日の差して

黒猫の寒九の雨に濡れてをり

静けさが好きとひと日の寒の雨

松田裕子

友が家で馳走されたり雑煮碗
初星を見上げてひとり帰途に着く
はくれんの冬芽付きたる角曲がる
七種粥に緑茶たつぷり注ぎけり
凍つる月面へと傾ぐ夜明け前
薬缶持ちフロントの雪流したる
散り紅葉融けたる雪に現るる
山茶花の歩道に散るを掃きにけり
老いし母胼ある子の手撫でやれり
風花や駅前バス待ちをれば

村上正人

朝礼の子令の声息白し
校庭に生徒一丸落葉掃く
立ち話終の花掃き溜めて
初時雨高速バスにうたた寝す
「決止まります」おもむろに手袋す
忘れ傘枯木に下げてありにけり
取り戻す笑顔のありて去年今年
玄関に雀来てゐる大旦
千支の名の神社に友待つお元日
トランプの置かれてゐたる炬燵かな

森口良樹

日向ぼこ同じ話に頷きつ
近道の小暗きところ綿虫来
裸木にあまたの雀木の葉めく
デバ地下の人混みに我年用意
落ち葉する大樹を見上げ年惜しむ
仕舞湯に浸かり遠くの除夜の鐘
仕舞湯に手足伸ばすや去年今年
あちこちにとんどの竹の組まれをり
葱抜いて隣の猫と帰りけり

山野ウタ

元旦の御堂静かに樂ながれ

元旦のもう暮るるなり御堂閉む

黒髪を一つに束ね初仕事

臘梅のひっそりと咲く山の寺

雪の道人の足跡たどりつつ

古写真見て懐かしむ雪積む日

紀英子

山茶花に顔をうづむる目白かな

黄昏や裸木ならぶ土手を行き

初詣人波の中一人行く

朝日さす踏み跡のなき雪の道

雪の日に靴下履かせ子を背負ふ

機窓から幾度も見たる雪の富士

なつ

初苗ひときは黒き瀬戸の橋

ゆさゆさと子らが竹引く吉書揚

暗闇の中にとんどの燃え盛る

家中に子らの声する松の内

上弦の月輝ける寒夜かな

大原良子

三輪車磨き幼子年用意

熱の子と額を合はす去年今年

水仕事終へて賀状の返事書く

初風に神社巡りをしてをりぬ

付き添ひの人も加はり小正月

高梨英子

冬の鳥この木塀か見上げたる

元旦のテレビ聞こゆる散歩かな

二回目も末吉と出て冬日和

鯛焼を温め直し分ちたる

雪の朝人の靴跡踏んで行く

土肥律子

太箸を並べて膳の始まりぬ

雪の夜や幾度も外を眺めては

凍る橋犬もそろりと渡りをり

慰霊碑を囲む水辺の凍りけり

撫子

大木に朝日差し込み年新た

元旦やいつものコース散歩して

元日の郵便バイク坂上る

小雪舞ふ瀬戸内海に汽笛かな

美耶

門先に樅植が実り杣の家

新雪や兔の通ふ道をゆく

雪付けし落葉松抜くる日の光

秋楡

大水盤なみなみ張られ冬の氷

大寒の夕焼に向き歩きをり

あちこちの羅漢頭に雪をのせ

桑門わかこ

木の葉舞ひ市電徐行のアナウンス

冬木立背ナを伸ばして深呼吸

願ひ込め掌かざす初日の出

桜陽

冬の朝マツトの上に手足伸ばす

弟のLINEで届く初日の出

手袋も襟巻もして外歩く

民

孫曾孫電話口へと今朝の春

凜として炭を継ぐ子の春着かな

新聞を待つて小雪の朝となる

みさ子

窓の外掠鳥の群近く見ゆ

冬の星雲より上に一つかな

上島康子

元旦の神社に長き列づく

元旦におみくじ引けば吉と出る

河原静子

雑煮餅いくつ食べたと競ひをり

門柱の傍に傾ぎて雪達磨

熊谷ゆり子

三輪車ともに萩はれ初詣

吹初の笙あたたむる静寂かな

高嶋絹代

餅の数だんだん減るも年迎ふ

雪催ヒートテックを身にまどひ

古川廣子

年新た川面きらめく夕日かな

川底に寒鯉二匹しづかなり

やす保

孫抱いて川辺歩いて冬ぬくし

かき集め日陰に作る雪達磨

山崎桂子

令和六年十二月度作品集より

知佳子 私の選んだ十句

秋風の集まる村へ下りけり	佐保光俊
旅立ちを明日に眠れぬ星月夜	高尾ひとみ
三越の重き扉や日記買ふ	あざみ
空に浮く鳥は遠くへ冬めける	亜矢
書き留めし言の葉あまた年の暮	綾乃
山茶花のつぎつぎと咲く蕾かな	大畑恵
日当たればしだいに寄りて鴨の群	暁子
拭きし窓眠れる山を映したり	村上正人
椅子ごとに膝掛のあるカフェテラス	山野ウタ
憧れは閉ちてから散る木槿なり	須美れい

ふじ女 私の選んだ十句

冬菊も鯉も見えなくなる日暮れ	佐保光俊
岩の上よく日をうけて大文字草	高尾ひとみ
新蕎麦を待ちつつ昼の酒とする	井藤希
貞子像へ歌ふ揃ひのアノラック	暁子
地下街に紛れ込みたり寒雀	知佳子
松茸の生える頃かと母の聞く	ちどり
風揚げの同じ糸引く兄いもと	雲雀
拭きし窓眠れる山を映したり	村上正人
車椅子一列にして日向ぼこ	森口良樹
スキップに揺るるボンボン冬帽子	山野ウタ